2016 年度 E.FORUM「全国スクールリーダー育成研修」実施の様子

京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター E.FORUM では、2016 年 8 月 19 日（金）・20 日（土）に、京都大学吉田キャンパス総合研究 3 号館講義室他において「全国スクールリーダー育成研修」を開催しました。当日は、北は北海道から南は宮崎県まで計 163 名（1 日目 147 名、2 日目 112 名）の教職員や教育委員会関係者の方々が参加し、盛会のうちに終えることができました。

＜1 日目＞ 8 月 19 日（金）

●オープニング＆自己紹介

研修運営担当の西岡加名恵准教授から本研修の概要説明をしました。参加者同士の自己紹介タイムを設け、全国各地から来られた方々の熱気が溢れる中でスタートしました。その後、午後の前半にかけては、3 つの分科会（分科会 A・B1・B2）に分かれ、講義・ワークショップを行いました。

●分科会 A ：「カリキュラム設計入門――パフォーマンス課題づくり」 担当：西岡 加名恵

はじめに、次期学習指導要領改訂に向けた議論のポイントを解説するとともに、パフォーマンス課題の作り方について説明しました。その後、実際に参加者にパフォーマンス課題づくりを体験していただきました。最後にルーブリック（評価指標）の作成方法についても説明しました。

＜参加者の声＞

・パフォーマンス課題について、ずっと勉強をしたかったので、大変勉強になりました。実際に問いを考え、そこから単元での目標を考え、どのような課題に仕上げていくのかが非常に難しかったですが、同時にいろいろ考えていくことは、自分自身にとっても楽しいことであり、その単元や教材に自分がどのように向き合っていくのかということを問われている気がしました。

・教材に対する理解（何を生徒に身につけさせたいか）が、本当に重要だと感じた。どうしても進度に追われてしまうことが多く、全体を見通した課題づくりができていないので、今回の「逆向き設計」を参考にして、指導のあり方を見つめ直したい。

・アクティブ・ラーニングが形式のみになってはダメで、生徒の思考がいかに深まっているかを重視すべきだと言われていましたが、この分科会で「逆向き設計」論を学び、自分もやはり形式中心に考えていたことに気づかされました。重点目標、「本質的な問い」、「永続的理解」を明確にした上で、適した手段を考え、シナリオを作るというワークを行い、今後の授業に活かしていきたいとワクワクしました。意欲的な先生方と学べ、本当に楽しく活動できました。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2016

●分科会 B1 ：「若い教師に伝えたい授業づくりの発想」　担当：石井 英真

授業づくりの骨格となる思考のフレームを紹介するとともに、教材研究をどう進めるか、学習者のつまずきをどう読み解くかといった、授業づくりにおける基本的な考え方について、ワークショップ的な演習を通して学びました。また、「教科する（do a subject）」授業をキーワードに、授業づくりの今後の方向性についても解説しました。

＜参加者の声＞

・学力論（教育目標論）、授業論を踏まえつつ、近年の動向についてお話してくださったので、問題の根本をクリアにみてとることができました。とりわけ、授業改善との関連で、教育目標の設定の方法（≒目標の明確化）について、具体的にレクチャーいただき、授業づくりに活かせると思いました。
・日本の伝統的な授業の手法である練り上げ、発問とゆさぶり等を基にした子どもたちを惹きつける授業を大切にしつつも、それを越える新たな形を取り入れた授業を若い先生とともに探っていきたい。概念形成のための発問の出し方のポイントが“昆虫”の模擬を通してよく理解できました。
・初任者研修を担当しており、若い先生方と授業づくりをしていく上での自分ができることを探し求めに来ました。指導案を書く意味、目標を明確にするとはどういうことかなど、自分の中にすとんと落ちました。整理して、また伝えていきたいと思います。参加してとても勉強になりました。
・アクティブ・ラーニングについて、詳しくお話いただき、とてもわかりやすかったです。動くための授業のようなイメージでしたが、教材が主になっていることを忘れてはいけないと思いました。教師は本当に教えたいことを教えない（自分で追究させる）も印象的でした。

●分科会 B2 ：「街づくりと学校づくり――アーキテクチャ論から考える教育」　担当：山名　淳

自律性をめぐる教育と保護の緊張関係について問題提起をした後、アーキテクチャ（人間が生み出す構造）論をもとに、街づくりと人づくり双方のつながりと課題について検討しました。

＜参加者の声＞

・人間がつくり出した文化である都市という視点から、教育（人間形成）を考えるということは新鮮で、環境が人に与える影響について改めて考える機会となりました。また、「教育的保護」は、教育学において大変重要な概念であると思いました。
・田舎の自然と人間関係が子どもを育てるに適していると思われながらも、人は都市に集中する。教育を受けるには、多様性のある都市がふさわしいと考えている人が多い…。子どもたちを見守り保護することで、自主性の芽を摘んだり、反抗（拒絶）心、また問題行動がますます潜在化していく。都会の中につくられた自然は果たして自然か…など多くの考える示唆をいただきました。
・「見守り」ということは、子どもが子どもを生き、成長していくことを保障するために、もっと教育現場でその価値が見直されるべきだと思いました。教師にとっては埋没しているので見えない教室というアーキテクチャに光を当ててのお話、とても頼もしく思いました。
・羽仁もと子さんのお話が印象的でした。リスク管理も大切ですが、もっと大事なことがあることを見失いたくはないと思いました。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2016

●シンポジウム ：「高等学校におけるカリキュラム改善――探究的な学習を中心に」

担当：桑原 知子・西岡 加名恵

地域にねざした課題設定能力の育成に取り組んでおられる福井県立若狭高等学校、演劇的手法を活かして生徒たちのコミュニケーション力の育成を図っておられる和歌山県立和歌山高等学校の先生方から、カリキュラム改善を具体的にどのように進めておられるかについて、ご報告いただきました。また、多様な高等学校が授業やカリキュラムの改善を進めていく上で教育委員会がどのような役割を果たしうるのかを探るため、大阪府教育センターの取り組みについてもご紹介いただきました。フロアからも沢山の質問や意見が寄せられ、カリキュラム改善のあり方について議論を深めました。最後に桑原教授より総括をして終了しました。

①「課題設定能力の育成を目指す指導と評価の実際」

担当：福井県立若狭高等学校・教諭　渡邉久暢先生

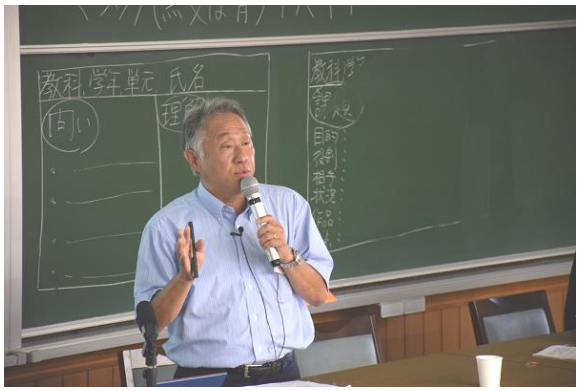
＜参加者の声＞

・「問いを生徒が持つ」ということはとても大切だと思います。同時にその問いを引き出す教師の問いかけも大切だと思いました。一般に言われていることへの真偽の問い、言われていないことについての問い、ひらめきの問い、驚きの問い、さまざまな問いのあり方を視野に入れて、探究のカリキュラムを紡ぎたくなりました。

・中学での総合の進め方とよく似ていると思いました。課題をつくるのが一番難しいと思うので、私たちがカンファレンスしながら生徒とその課題について話せたら…と思うのですが、なかなか難しいですね。時間と教師の関わりがなかなか実現しない…。喋ることで課題へのイメージや見通しをはっきりさせていくというのが大切ですよね。

②「高校における教員の職能成長と授業改善の可能性を探る――演劇的手法を用いたコミュニケーション力の育成とその評価研究から」

担当：和歌山県立和歌山高等学校・教諭　西條哲司先生



＜参加者の声＞

・西條先生のおっしゃっていた通り、AL は実は教師が自己を問い直すことになると私自身も痛感しています。この AL で、石井先生の言うところの“真正の学習”に至るには、何よりも教師が生徒への揺るぎない信頼と愛が根底に必要なのだと共感できました。

・他者に対する時、主体は生まれるのではないかなと思いました。協働する仲間としての他者を呼び起こす力が演劇にはあると思いました。生徒たちは無意識的に人物の中の時間と文脈を読み、あるいは想像し、互いに他者となり得ていたのではないかと思います。そこには純粋経験とでもいうような自覚の問いがあったように思います。先生もそのような教師としての存在論的問いがあったように思いました。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2016

③「生徒の学びを起点とした授業改善とカリキュラム開発
――教育センターとしてどう支援するか」
担当：大阪府教育センター・主任指導主事　岡本真澄先生

＜参加者の声＞

・高校が変わったら、中学が変わる、その時はじめて小中高大の接続が可能になるように思いました。そのために教師は、What・Why・Howという問いに加えて、驚きの問いをカリキュラムそのものに対し、自己に対して、問い続けることが大切だと思いました。

・AL や CM を一部の先生方は熱心に取り組もうとされているが、なかなか学校全体としての取り組みにするのは難しい。しかし大阪府教育センターの取り組みに、センターが支援しながら学校全体で協働して取り組めるように上手に支援されていると思いました。数年後の大阪府立高校が楽しみです。

――質疑応答の様子――

＜2 日目＞　8 月 20 日（土）

●オープニング＆自己紹介タイム

西岡加名恵准教授の司会のもと、オープニング＆自己紹介タイムが始まりました。新たな参加者を交え、前日同様に自己紹介を行いました。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2016

●講演「米国の高大接続プログラム――AP(Advanced Placement)プログラムに注目して」

担当：高見　茂

現在、日本の高等教育政策の柱の一つである高大接続について、その解説と問題点を提示しました。さらにその問題点を克服できる高大接続プログラムの一つとして、米国で 1950 年代半ばから始まり、発展・拡大している AP(Advanced Placement)プログラムについて紹介しました。また、実際に 3 月に訪問した米国での現地調査の様子も紹介し、その内容を検討しました

＜参加者の声＞

・高大接続の動向は、大学入試制度が結局高校課程の実質的カリキュラムを規定しているので、非常に注視しています。AP プログラムについてははじめて聞いたので、大変貴重な機会でした。
・AP プログラムが自分たちの活動の幅を広げていくことにつながるという話は発想を転換された。どうしてもやらされ感、押しつけられ感を持ってしまうのが、新規の教育政策につきまとう。そんな思いから脱却するような考え方だった。とても参考になった。
・米国での AP プログラムの概要から、改めて「市民的、社会的関与」の視点から高校教育を見直す必要性を痛感しました。それにしても、米国で AP プログラムが受け入れられる背景の一つに「大学経営の財政的節約」があるとは驚きでした。日本の大学でも教育系、人文社会系学部の問題がありますが、米国の状況は他人事ではないと感じました。
・教育と財政を結びつけて考えることはとても面白いと思いましたし、大切なことだと思いました。日本の国家予算から教育への配分が減る中で、自分たちでどうお金を確保していくかということは大事なことと気づきました。また、京都大学の創設の話は、大変興味深かったです。大学の社会貢献は大切とは思います。

●シンポジウム＆教科等別分科会：「E.FORUM スタンダードの再検討に向けて」

担当：西岡 加名恵（教育学研究科、趣旨説明）、
山本 はるか（帝塚山学院大学、国語科）、
鋒山 泰弘（追手門学院大学、社会科）、
石井 英真（教育学研究科、算数・数学科）、
大貫　守（教育学研究科院生・日本学術振興会特別研究員、理科）、
小山 英恵（鳴門教育大学、音楽科／美術科）、
徳島 祐彌（教育学研究科院生・日本学術振興会特別研究員、保健体育科）、
北原 琢也（教育学部非常勤講師、技術・家庭科/教師教育ほか）、
赤沢 真世（大阪成蹊大学、英語科）

はじめに、西岡准教授より趣旨説明があり、その後、教科ごとのグループに分かれ、2014 年に作成した「E.FORUM スタンダード（第 1 次案）」の改訂に向けて議論を深めました。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2016

＜参加者の声＞

・資料には、一般的な書き方をされている部分をグループ討論の中で他の先生方の意見を聞いたり、話し合ったりする中で、具体的な理解にしていくことができました。また、まだまだ勉強不足であることも実感でき、とても良い刺激になりました。なかなかすっきりしたスタンダードは自分の頭の中だけでは見えてこないですが、このような機会を積み重ねていく中で、いずれは具象化してくるのではないかと思います。

・国語科の先生方と交流しながら、改めて言葉・文学の楽しさ、難しさを実感しながら、楽しい一時を過ごすことができました。みんなで議論しながらまとめあげる、元気をいただきました。

・社会科として歴史、地理、公民を考えていくのかという軸を明確にしてもらえたため、大きな枠組みができたと思った。このあとの進展に興味を持ちました。

・単元づくりにとても参考になると思います。パフォーマンス課題をどう設定するかが目標達成に大きく関わってくると思うが、もう少し真正の数学（つくる側）の内容も個人的には大切にしたい。小中では教科書で実用的な視点もかなり入っている。数学そのものの面白さも子どもたちにわかってほしい。

・高校の先生とじっくり話す機会がなかったので、貴重な時間を過ごすことができた。高校 4 人小学 1 人の組み合わせで、中学校段階のことを考えるのが難しかった。物理や理科に対する捉え方が校種の違いで大きいのを感じた。

・体育科の価値は何か、他教科との違いは何か、大切な問いだと思いました。保健科の内容が小中ではあまり差がないこと、発達段階に合った内容の検討も必要ではないかと思います。保健科は探究的な学習に向いている教科なので、これからも学んでいきたいと思います。

・個人的には、英語という言語の「ナラティブ（語り手が誰であるか？）」の表し方に強い関心を持ち、生徒にどのような順序立てをして教えていこうかと考えています。日本語と違って、英語は例えば助動詞や副詞に他者（異者）の考えを入れることができます。発達段階と効果的にマッチングできれば、より幅広い奥深いコミュニカティブな学びができるのではないかと期待しています

●クロージング

教科のグループごとに総括をしました。最後に研修評価アンケートにご記入いただき、（2 日間とも参加された方には）記念に修了証書をお渡しして終了となりました。

皆様、大変お疲れ様でした！

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2016